



1 適正な水管理

○ 水管理の基本は、“浅水管理による間断灌水”

浅水管理は、水温の日較差を生じさせ、分けつが発生しやすくなる。

● 田干し(移植後1ヶ月～出穂28日前頃)

土壤への酸素供給と過繁茂抑制を目的に実施する。

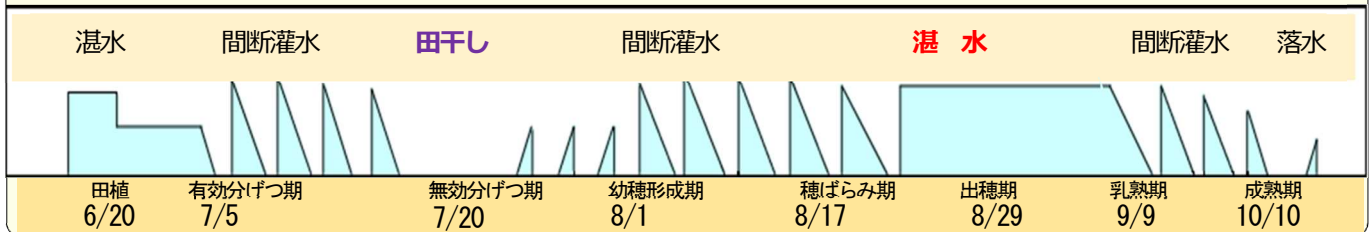
- ・ 茎数 30 本/株程度で田干し開始
- ・ 田干し程度は黒湿り、亀裂幅は1cm 未満
(大きなひび割れは根が切れて生育を抑制)



田干しで過剰分けつを抑制し、適正な籾数で粒張りの良い「おいでまい」に仕上げましょう！

● 田干し終了後、幼穂形成期頃から間断灌水を再開しましょう。

<水管理イメージ図>



2 中期除草剤

時期を逃さないよう、草種に応じた除草剤を散布しましょう。



草種	薬剤名	備考
ノビエ	(液剤) クリンチャーEW	使用時期や散布方法等、 使用上の注意事項をよく読んで適期に適正に散布 しましょう。
キシウスズメノヒエ	(粒剤) クリンチャー1キロ粒剤	
ノビエ	(液剤) クリンチャーバス ME 液剤(※)	
ホタルイ・(広葉雑草)等	(パック剤) セカンドショットS ジャンボMX	
ホタルイ・(広葉雑草)等	(粒剤) パサグラン粒剤(※)	

注) 薬剤(※)の使用上の注意点

散布は、足跡に水が残る程度の落水状態で行い、散布後3日間は入水しない。

散布後、降雨があると殺草効果が減衰するため、晴天が続く日に行う。

3 ★究める！ 葉いもち対策

●いもち病の主な発生要因

- ・夏季において「低温・日照不足」条件で発生しやすい。
- ・苗いもちの発生を防ぐとともに、苗いもちを本田へ持ち込まない。
- ・窒素肥料の多施用は、いもち病の発生を助長する。(適正施肥が重要)
- ・補植用の取置苗は伝染源となる。(補植後は速やかにほ場外へ処分)

●BLASTAM(ブラスタム：イネいもち病発生予測モデル)

アメダスデータの4要素(気温・降水量・風速・日照)を基に、感染好適日を推定する。

R5	6.21	6.22	6.23	6.24	6.25	6.26	6.27	6.28	6.29	6.30	7.1	7.2	7.3	7.4	7.5	7.6	7.7	7.8
多度津	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-
滝宮	-	-	-	-	-	●	-	-	●	-	-	●	●	-	-	-	-	-

●：感染好適日 1～4：準感染好適日(2：湿潤時間10時間以上であるが、前5日間の平均気温は20℃未満。)

いもち病の孢子が発芽・感染するためには、以下の3つの条件が満たされる必要がある。

- ①葉面湿潤時間10時間以上
- ②葉面湿潤時間中の平均気温15～25℃
- ③前5日間の平均気温20～25℃

感染した場合は、約7日後にいもち病の病斑が現れる。

【確認防除】

●葉いもち初発10日前～初発時(7月上旬頃)

予防効果のある コラトップ豆つぶ(250g/10a)

●葉いもち初発時

治癒・予防効果のある
 又は ブラシフロアブル(1,000倍)
 又は ブラシ粉剤DL(3～4kg/10a)
 又は ワイドパンチ豆つぶ(250g/10a)



進行型病斑
→直ちに防除が必要

停滞型病斑
→穂いもちの伝染源

4 病害虫発生予察情報(令和6年7月2日香川県病害虫防除所発表)

●葉いもち(発生量：やや少)

7月の気象予報(気温：高い 降水量：ほぼ平年並み)から、ほ場で発生が確認される場合は早急に防除を行う。

●斑点米カメムシ類(発生量：やや多)

綾川町におけるミナミアオカメムシの誘殺数(期間：6月第1半旬～第5半旬)は、平年並であった。

近年は、イネカメムシの発生が増加傾向にある。

休耕地はカメムシ類の繁殖場所となるため、耕起等により雑草の少ない状態を保つ。



ミナミアオカメムシ
成虫



イネカメムシ
成虫

★マイスターチェック★

- 水管理は**間断灌水**を基本としていますか。常時湛水はしていませんか。
- いもち病の伝染源となる**補植用の取置苗**は、**ほ場外へ処分**していますか。
- 田干し**は**適正**ですか。きつい田干しは、イネの根が切れて抵抗力が低下し、紋枯病等の病害虫の発生を助長します。



熱中症に注意して農作業に取り組みましょう！